THEORETICAL MONOGRAPH

零式写真芸術論

零の地平と写真成立の構造

Zero-Horizon Photographic Art Theory

NAOKI KIMURA

木村尚樹

2026

ZERO-HORIZON / PHOTOGRAPHIC ART THEORY

目次

プロローグ　零の地平 **1**

写真成立以前を問うための理論的位置

序章　写真成立の条件へ **2**

零式写真芸術論の方法、比較座標、射程

第一章　零式四相 **5**

世界側の深層生成モデル

I　元零（Proto-zero） 6
II　零振（Zero-tremor） 8
III　零応（Zero-response） 10
IV　還零（Zero-return） 12
V　四相の連関構造 13
VI　深層四相から外層構造へ 15

第二章　零式外層構造 **17**

深層生成から外層記述へ

I　外層の理論的位置 17
II　外層三相の論理構造 18
III　構造一次相 19
IV　構造複合相 20
V　構造時間相 21
VI　三相は同一外層過程の多次元記述である 23
VII　深層四相との関係 23
VIII　写真との関係 24
IX　外層構造の認識論的位置 25
X　外層構造の説明範囲 25

第三章　Proto-Qualia **27**

世界側外層構造における構造的閾値

I　概念を導入する理由 27
II　qualia との区別 28
III　構造的閾値 28
IV　構造的閾値としての Proto-Qualia 29
V　形成条件上の主体非依存性 29
VI　主体側との関係 30
VII　認識論的位置と循環論法 30
VIII　近接概念との境界 31
IX　現象学との境界 31
X　写真成立との関係 32
XI　Proto-Qualia が担う範囲 32

第四章　主体の内部変調 **33**

世界側の構造的閾値と主体側の変化

I　外部作用と主体側の変化 34
II　内部変調が含むもの 34
III　Proto-Qualia との関係 35
IV　前反省的な応答と意識化 35
V　オートポイエーシスが与えた比較座標 36

VI　構造決定性との比較とその限界 37
VII　内部変調の識別条件 37
VIII　内部変調と写真行為 38
IX　主体側で閉じ、写真機へ渡す 38

第五章　写真機と一回的撮影関係事象 39

写真を有限な痕跡として捉える

I　写真成立そのものを問う 39
II　一回的撮影関係事象の構造 40
III　写真機の位置 40
IV　世界側条件と有限な条件配置 41
V　痕跡と指標性 41
VI　一回性と数的非同一性 42
VII　一回の撮影と複数の成果物 43
VIII　過去性と撮影事象 43
IX　記録・証拠・社会的使用との距離 43
X　主体関与の時間的分布 44
XI　写真痕跡の定義 44
XII　成立した写真は次の関係へ入る 45

第六章　写真作品と観者 46

成立後の像と鑑賞事象

I　写真は観者より先に成立している 46
II　感覚は意味形成に先行し得る 46
III　作品条件と観者側情動 47
IV　鑑賞事象における観者の個別性 47
V　Barthes のpunctum との比較 48
VI　身体・注意・記憶 48
VII　作品の実現形態と提示条件 49
VIII　作者の意図と観者 49
IX　Proto-Qualia と鑑賞事象 49
X　鑑賞事象の一回性 50
XI　写真芸術の射程へ 50

第七章　零式写真芸術論の射程 52

生成美学と現代画像環境

I　写真を生成過程から捉える 52
II　写真芸術における作者の位置 52
III　限界芸術との比較 53
IV　写真と生成画像 53
V　写真と生成画像の混成 54
VI　痕跡の起源と像の真偽 55
VII　生成美学の射程 55
VIII　理論の説明範囲 55
IX　未解決の問題 56
X　第七章の結論 56

関係補章　零式写真芸術論と写道 58

同根・独立・非混合的連関

I　同じ実践から異なる問いが分化する 58
II　理論体系と実践体系の位置関係 59

III 独立体系としての写道 59
IV Proto-Qualia と両体系の位置 59
V 二体系が併存する位置 60
VI 語彙の近接と概念上の位置 60
VII 構造確認・作者的定位と写道の境界 60
VIII 形成史と理論的妥当性 61
IX 二体系の境界関係 61

理論補論　零式外層構造の再記述 62

運用概念と構造記述の分離

I 構造一次相の下位様態 62
II 構造複合相の下位様態 64
III 構造時間相の下位様態 65
IV 三相の重なりと記述精度 67
V 世界側記述と成立済み写真の確認 67
VI Proto-Qualia との境界 68
VII 運用篇との境界 68
VIII 記述精度を高めながら本論の境界を保つ 69

比較補論　量子的想像力と「成立以前」 70

比喩の有効性と限界

I 形成史上の接触 70
II 近接する問いと異なる対象 70
III 可能性・関係・成立という比較語彙 71
IV 観測と写真行為 72
V 干渉・collapse・decoherence の境界 72
VI 「量子的想像力」という限定 73
VII 生成画像との境界 74
VIII 形成上の刺激と理論的自立 74

検証補論　零式が引き受ける問い 75

想定される異論と理論上の応答

I 四相はなぜ四相なのか 75
II 「世界側」は不可視の実体を仮定しているのか 77
III Proto-Qualia は不要な第三項ではないのか 78
IV 写真の「一回性」は自明ではないのか 79
V 零式はどの条件で再検討を要するのか 80
VI 理論の確定と開放性 81

運用篇　零式作品相位プロトコル 82

構造確認と作者的定位

I 成立済みの写真から始める 82
II 構造確認の基本語彙 83
III 確認は往還して行われる 84
IV 構造確認と作者的定位 84
V 作品相位と基幹作品相群 85
VI Threshold——作品横断軸 85
VII Return to ZERO——回帰と再開 86
VIII 作品体系の名称区分 86
IX 相位変更と履歴 87
X 作者による公式定位と第三者の読解 87

XI　運用上の境界 88
XII　構造確認と作者的定位で閉じる 89

終章　写真成立の地平 90

零式写真芸術論の成果、射程、限界

I　成立論としての貢献 90
II　一回的撮影関係事象と写真痕跡 90
III　成立後に開かれる関係 91
IV　理論の射程と境界 91
V　理論の限界 92
VI　残された問い 93
VII　零の地平へ戻る 93

エピローグ　還零のかすかな輪郭 94

Notes 95

Bibliography 97

用語表 99

試読用サンプルについて

このPDFは、『零式写真芸術論』（零の地平と写真成立の構造）の試読用サンプルであり、Japanese Edition / Version 1.0 から一部の章を収録したものである。

収録範囲は、表紙、目次、プロローグ、序章、第一章「零式四相」、エピローグ、Notes、Bibliography、奥付である。

本文の各面に付した番号は、全文と同一である。目次には全体の構成を示すため全項目を収め、収録していない章・補論の項目にはリンクを設定していない。

引用・参照の際は、全文を典拠とすること。

プロローグ　零の地平

写真成立以前を問うための理論的位置

写真について論じるとき、多くの場合、そこにはすでに像がある。
零式写真芸術論は、成立した像から開かれる解釈や評価に先立ち、その像が成立するまでの条件へ問いを遡らせる。

ここで問われるのは、写真成立へ関与する世界側の差を、像、作者、対象、意味、観者といった成立後の区別に先立って、どのような生成構造として記述できるかという問題である。

本論が用いる「以前」は、時計時間上の先行ではなく、理論上の先行性を指す。
撮影の数秒前や知覚処理の数ミリ秒前を測定する時間論ではなく、写真論が説明のために用いる諸区別を、どの地点から前提に置くかという構造上の順位である。

この理論的位置が、**零の地平（Zero-Horizon）**である。

『零式写真芸術論』と Zero-Horizon Photographic Art Theory は、同一の理論体系を指す日本語名と英語名である。 英語名に含まれる Zero-Horizon は、その理論的基点である「零の地平」に対応する。日本語の「零式」は、この地平を基点として展開される理論体系の略称として用いる。「零式」は Zero-Horizon の逐語訳ではない。

以下、日本語本文では、理論体系全体を指す場合に「零式写真芸術論」、または文脈に応じて「零式」を用い、理論上の基点概念を指す場合には「零の地平」を用いる。
英語表記 Zero-Horizon は、英語名称との対応、または「零の地平」との概念対応を明示する必要がある箇所に限って併記する。

零の地平では、世界側の差を対象、意味、表象、感情へ即座に還元せず、まず世界側の生成として記述する。その後、世界側外層構造、主体側内部変調、写真機を含む一回的撮影関係事象、成立後の写真、観者による鑑賞事象へと論を進める。

写真成立は単一原因へ還元せず、世界側深層生成、外層構造、主体側変化、写真機の作動を相互に区別して扱う。
したがって、本論の第一の問いは次のように置かれる。

> **写真が成立する以前、世界側の差はいかなる生成構造として記述できるか。**

第二の問いは、その世界側構造が、主体、写真機、時間的切断を含む撮影事象へどのように関与するかである。
零の地平は、この二つの問いを接続する理論的出発点である。

序章　写真成立の条件へ

零式写真芸術論の方法、比較座標、射程

零式写真芸術論は、写真芸術の成立を、完成した像や意味の分析だけに限定せず、その成立条件まで遡って記述するための理論である。

その形成には、写真実践に加えて、写真論、美学、現象学、オートポイエーシス論、量子論、限界芸術論などとの比較的接触が関与している。

ただし、**概念形成上の参照と、完成した理論命題を支える論証は同一ではない。**

形成史上の参照は、なぜ特定の問いが現れ、どのような概念分節へ向かったかを示す。

これに対して理論本文では、概念間の整合性、説明上の必要性、既存理論との比較、適用範囲、限界によって各命題を検討する。本論はこの二つを分離したうえで接続する。

1　　写真論の問いをどこへ置くか

写真理論には複数の出発点がある。作者の意図、対象との指示関係、写真機という装置、記録性、複製性、社会制度、記憶、観者経験はいずれも写真を論じるための重要な座標である。

零式が区別するのは、それらの優劣ではなく、**問いが置かれる位置**である。

像と対象との関係を論じるとき、すでに写真像は成立している。作者の表現を論じるときには、作者、対象、選択、像という区別が導入されている。観者経験を論じる場合も、鑑賞対象としての写真がすでに存在する。

零式は、これらの成立済み関係を前提とする議論に、その写真が成立するまでの条件を問う成立論を加える。その最初の記述対象が、世界側の深層生成である。

2　　理論モデルとしての零式四相

世界側深層生成は、元零、零振、零応、還零という四相によって分節される。

四相はそれぞれ、均衡、偏位、関係化、再均衡という異なる機能を記述する。

ここでいう四相は、自然科学的な測定単位でも、撮影者の心理分類でも、成立後の作品分類でもない。写真芸術論の内部で、写真成立以前の世界側生成を機能差によって記述するための**分析モデル**である。

零式四相の理論的成立には、各相が異なる説明機能を持ち、相互関係が矛盾なく記述され、後続する外層構造、主体側内部変調、写真成立論との役割分担が保たれることが求められる。第一章では、この条件を四相の定義と相互関係から示す。

3　　形成史上の外部参照

鶴見俊輔の限界芸術論は、芸術制度の成立条件へ問いを戻す視点として、形成史上の比較座標となる。[1]ただし、制度以前を扱う限界芸術論と、写真成立以前の世界側構造を扱う零式は対象領域を異にする。両者の関係は理論的同型ではなく、「成立済みの枠組みから問いを遡らせる」という問題設定上の接点に限定される。

オートポイエーシス論は、外部からの作用と内部変化を区別する思考に重要な比較座標を与える。[2]本論では、撮影主体や「見る」という行為全体を生物学的システムへ同一化せず、第四章で主体側内部変調を考える際に限定して参照する。

量子論は、可能性、関係、成立、観測といった語彙をめぐる比較的思考を刺激した形成史上の参照である。[3]一方、零式四相と量子現象との一対一対応は理論の科学的基盤を構成しない。量子論との関係は、類比が有効な範囲と破綻する地点を比較補論で検討する。

これらに共通するのは、形成史上の重要性と論理的基盤を分けることである。

4　　現象学との比較座標

零式が「成立以前」を扱う以上、現象学は重要な比較対象となる。Husserl の志向性や現象構成、Merleau-Ponty の身体的知覚はいずれも、経験がどのように成立するかを考えるための精密な理論座標を与える。[4]

ここで設定する差は、「どちらがより原初的か」という序列ではない。前反省的であっても主体にとっての経験として成立しているものと、主体側経験から区別して世界側生成を扱うモデルとでは、説明対象が異なる。

この比較は、第一章の四相、第三章の Proto-Qualia、第四章の内部変調でそれぞれ具体化する。現象学を理論的基礎として借用するのではなく、世界側と主体側の境界をどこに置くかを検証する比較座標として用いる。

5　　写真理論との比較座標

Peirce のindex、Barthes の写真と過去の現実との関係、Benjamin の複製技術論、Sontag の写真文化批判は、成立した写真が対象、制度、記憶、社会とどのような関係を持つかを考える重要な座標である。[5]

零式は、これらを置き換えるのではなく、成立論という別の問いを加える。
像が何を指示するかに先立って、一回の写真成立事象がどのような世界側条件、主体側変化、写真機の作動、時間的切断から構成されたかを問う。

この比較は第五章以降で論点別に行う。序章では、零式が既存写真論より「根源的」であると序列化するのではなく、異なる問いがどの位置で接続するかを示すにとどめる。

6　　理論の射程

零式写真芸術論の主要な適用領域は写真芸術である。

第一章では世界側の深層生成を四相として記述し、第二章では外層構造を三つの記述次元から扱う。第三章では、その外層構造に成立し得る構造的閾値をProto-Qualiaとして限定する。第四章では主体側の内部変調を、第五章では世界、主体、写真機、時間的切断が形成する一回的撮影関係事象と有限な痕跡としての写真を論じる。第六章では成立済みの写真と観者との鑑賞事象を扱い、第七章では生成AI を含む同時代の画像環境との比較を通じて写真の成立起源を再検討する。

この構造から他の芸術領域へ問いが開かれる可能性はあるが、本論が直接論証する対象は写真芸術に置かれる。

主要七章の後には、零式と同じ写真実践の蓄積から分化した写道（Shadō）との関係を、関係補章として扱う。写道は写真実践における主体の構えを扱う別体系であり、零式の内部の主体論とは役割を異にする。

両者は形成史上の共通根を持ちながら、それぞれ異なる目的と概念上の位置を持つため、その関係は二体系の境界と隣接として検討される。

その後、理論補論で外層構造の記述を精密化し、比較補論で形成史上の外部参照との境界を確認する。さらに検証補論で理論内部の異論と再検討条件を扱い、運用篇では成立済み作品の構造確認と作者的定位へ移る。

第一章では、まず元零、零振、零応、還零について、定義、必要性、比較座標、相互関係、理論上の限界を検討する。

第一章　零式四相

世界側の深層生成モデル

写真成立以前を単一の「無」や「静止」として表現すると、差の発生、関係化、再均衡という推移を理論的に区別できない。
一方、出発点から対象、情報、意味、目的を置けば、成立後の概念を深層生成へ先取りすることになる。
零式四相は、この二つの問題を回避し、世界側生成を機能差によって分節するために導入される。
元零（Proto-zero）、零振（Zero-tremor）、零応（Zero-response）、還零（Zero-return）は、世界側深層生成の異なる機能局面を記述する。
詳細な定義に入る前に、四相の配置だけを予備的に示す。

- **元零**：差が特定の方向へ優勢化していない均衡。
- **零振**：その均衡に生じる、方向未確定の偏位。
- **零応**：偏位が生成内部で関係を持つ構造差として応答性を帯びる局面。
- **還零**：差が一方向へ固定され続けず、中性化を伴う再均衡へ向かう局面。

この配置は、

元零 → 零振 → 零応 → 還零 → 再均衡／新たな偏位可能性

という論理順序を持つ。矢印は測定可能な時間系列や機械的因果系列を示すものではなく、各相の機能上の配置を示す。
以下で後続相の名称を先取りする箇所も、この全体配置に基づく予備参照である。
四相の境界は物理的境界線ではなく、理論上どの機能を記述するかによって設定される概念的境界である。

四相モデルの方法的位置

1　　四相モデルの方法的限定

零式四相は、世界側深層生成を記述するための分析モデルである。
その対象は、写真成立に関与し得る世界側生成である。主体の心理状態、観者の感情、作品分類は、後続する別の領域の問題として扱う。
四相には論理的な順序がある。その順序は、元零から零振、零振から零応、零応から還零という機能上の推移を示す。
ここで必要なのは、時間計測ではなく、生成上の差異を分節することである。

また、四相は、後続章で扱う外層構造や作品運用上の語彙とは役割を異にする。
第一章では、世界側深層生成の位相差だけを扱う。
後続概念との役割の差は、それぞれの概念を導入した段階で改めて定義する。

2　四相の認識論的位置

零式四相は、直接観察された対象を記録する分類表ではない。
しかし、完全に任意な命名でもない。
四相は、写真成立以前を論じる際に必要となる説明上の差を、概念的に再構成する。
各相は独立した説明機能を担い、相互関係を矛盾なく記述しながら、後続する外層構造・主体側内部変調・写真成立論との役割分担を保つ。
この点で四相は、経験科学における直接測定モデルとも、恣意的な象徴体系とも異なり、写真芸術論のなかで成立条件を記述する分析モデルとして位置づく。

3　「推移」という語の意味

本章では四相の間に「推移」という語を用いる。
推移は、物理的対象が一つの容器から別の容器へ移動することを意味しない。
ある生成局面を記述するために必要な機能が変化し、次の記述局面が必要になることを、理論上の推移として明確に示す。
したがって、四相間の境界は測定値によって決まる閾値ではなく、説明機能の変化によって設定される。
ここでいう境界は、後続章で別に定義する構造的閾値や作品上の分類語とは区別される。
詳細は各概念の初出箇所で示す。

I　元零（Proto-zero）

未分化の均衡と生成可能性

1　定義

元零とは、差がまだ特定の方向、対象、意味として優勢化していない世界側の均衡位相である。
ここでいう均衡は、差の完全な欠如ではなく、差が後の関係へ組織され得る可能性を保ちながら、特定の方向が支配的になっていない状態を指す。
元零は、この意味で生成の起点となる。

2　理論上の必要性

四相の第二局面として後に詳述する「偏位」を記述するためには、その基準となる位相が必要である。

その基準を完成した秩序や固定した対象配置に置くと、偏位は既存状態の乱れとしてしか理解できない。元零は、完成秩序より前の中性的均衡を基準として設定することで、後続する偏位を生成の内部に位置づける。
したがって、元零の理論的役割は、偏位と回帰を記述可能にする基準位相を与えることにある。

3　　未分化と潜勢

未分化とは、差が存在し得る一方、その差が特定の対象、意味、方向へ確定していない状態である。

この状態には生成可能性がある。潜勢とは、差が関係へ組織される余地が開かれていることを示す分析語であり、独立した物理量ではない。

元零の潜勢は、量子的 potential state や物理的 energy との直接対応を前提としない。

潜勢という語の役割は、生成可能性を肯定することにある。

元零を完全な無差別状態として設定すると、後続する偏位は外部から突然付加された要素としてしか説明できない。
元零に保持された偏位可能性は、零振を同一生成過程における機能変化として位置づける。

潜勢は元零とは別の第五要素ではなく、元零の生成可能性を説明する属性語である。

4　　構造的中性

元零に付随する「静けさ」という表現は、構造的中性を感覚的に補助する比喩として用いる。正定義は、差が特定の方向へ優勢化していない均衡である。
ここでいう静けさは情緒的な沈静や作品上の雰囲気を指すのではなく、特定方向への優勢化がまだ生じていないという構造上の中性を示す。

5　　比較座標：現象学と「間」「空」

元零と現象学との比較で問題となるのは、起源の深さではなく記述対象である。
現象学は、前反省的な経験を含め、主体にとって世界がどのように現れるかを精密に扱う。
これに対して元零は、その経験内容から区別された世界側生成を分析モデルとして設定する。
したがって、元零を現象学より「さらに前」にある普遍的実在として序列化する必要はない。両者の差は、主体側経験を記述する理論と、主体側経験から区別して世界側生成を扱うモデルとの方法的な差にある。
日本思想・美学で用いられる「間」や「空」も比較上の近接語となり得るが、それらは関係性や空間性をすでに含む多義的な概念である。

元零はその**伝統概念を理論的基礎とするのではなく**、差が特定方向へ優勢化していない均衡という限定された機能を担う。

6　　他相との関係

元零は、四相のなかで偏位が生じる基準を与える。
予備配置で示した第二局面では、この均衡に非対称性が生じる。第四局面では、偏位と応答を経た構造が再び中性的な均衡へ向かう。
詳細な定義はそれぞれの節で行うが、元零の段階では、偏位の基準と回帰の参照点を与えることが理論上の役割となる。

7　　写真論上の位置

元零は、写真成立以前へ世界側の記述を遡るための基準位相である。
写真そのものの成立は、後に世界側条件、主体側内部変調、写真機、時間的切断を含む一回的撮影関係事象として論じる。
元零は、その写真成立論における世界側記述の出発点を与える。

II　　零振（Zero-tremor）

均衡に生じる方向未確定の偏位

1　　定義

零振とは、元零の均衡に生じる方向未確定の偏位である。
「最小の偏位」という表現を用いる場合、最小は測定量を指さず、深層モデル上で最初に区別される差を示す。
元零では差が特定の方向へ優勢化していない。零振では、その均衡が非対称性を帯び始める。

2　　偏位の位置

零振は、主体による認識や選択より前に、世界側構造として記述される差である。
零式は、世界側の差を撮影者の意図の結果へ還元せず、主体の認識から区別して位置づける。同時に、本理論は偏位の究極原因を物理学的に説明することを目的としない。零振は、原因論ではなく生成位相の記述として位置づけられる。

3　　非対称性としての偏位

零振の偏位は、均衡内部に具体的な非対称性が現れ始めることを示す。
元零と零振の間に、正常／異常という価値序列を設定する必要はない。
偏位は、生成可能性が関係変化へ移る最初の局面として扱われる。

4　　意味と方向

零振の正定義には、完成した意味内容や目的を含めない。
後に主体や観者が意味を与える可能性は保持される。ただし、その後成的意味を零振の構造へ遡及的に組み込まない。
「方向未確定」は、目的的方向がまだ理論上成立していないことを示す。

5　　比較座標：前反省性と「未発」

現象学が前反省的経験や現れの成立条件を扱う場合、その記述にはすでに主体と世界の相関が含まれている。零振が記述するのは、その経験内容ではなく、主体側の認識から区別された世界側の偏位である。

零振と前反省的経験の差は、原初性の序列ではなく説明対象の差にある。
現象学との比較は、零振の存在論的優位を示すためではなく、主体経験を深層生成へ先取りしないための境界設定として働く。
一方、「ゆらぎ」「未発」「兆し」といった日本思想・日本美学に近接する語彙は、方向が確定する以前の変化を表す比較語として参照できる。ただし、零振は、情緒的な揺れや美的感受性を定義内容に含めない。「未発」との近接も概念系譜の同一性を意味せず、方向未確定の偏位という機能を説明する範囲に限定される。

6　　非同一性

零振が生じた生成は、偏位を経ていない生成と数的に異なる。
この非同一性は、深層生成に履歴差が生じることを示す。
還零によって再均衡へ向かう場合にも、その履歴差は四相の論理構造に残る。
ここでいう履歴差は、世界が過去を記憶するという実体論を要求しない。
必要なのは、生成を数的同一性だけで扱わず、偏位を経た局面と偏位を経ていない局面を理論上区別することである。
この区別は、後の第五章で撮影事象の一回的撮影関係事象を論じる際にも重要な準備となる。ただし、深層生成の履歴差と写真の一回性は異なる論点に属する。

7　　主体経験との区別

撮影者側に生じる「何か」という感知は、第四章で主体側内部変調として扱われる。
零振は世界側深層の偏位である。
この区別により、「ゆらぎ」「気配」「予感」といった経験語を、世界側構造と直接同一化することを避ける。

8　　零応への関係

零振は差の発生を記述する。

零応は、その差が生成内部で関係を持つ構造差として応答性を帯びる位相である。
両者の差は変化量ではなく機能にある。
このため、零振から零応への推移は論理的に記述されるが、自動的な機械因果としては扱わない。

9　写真論上の位置

零振は、作品上に現れるぼけ、粒子、傾き、偶然性などの視覚的特徴を分類する語ではない。
写真論上の意義は、主体の選択以前に世界側の差を記述可能にする点にある。
その差が写真成立へどのように関与するかは、外層構造、主体側内部変調、写真機を含む後続の議論によって限定される。

III　零応（Zero-response）

偏位が構造差として関係を帯びる位相

1　定義

零応とは、零振として生じた偏位が、世界側深層生成のなかで関係を持つ構造差として応答性を帯びる位相である。
ここでいう応答性は、世界の人格化ではなく、偏位が生成内部の関係において後続する構造と結びつくことを示す。
この定義により、零応は意味反応や情緒反応と区別される。
「応答性」は、単なる偏位以上の関係化を一語で示す。ここで応答の主体は想定されない。零応が記述するのは、世界側深層生成の内部で差が関係を帯びることそのものである。
この語には日常語としての対話的含意があるため、本論では常に構造的応答性という意味に限定して用いる。

2　零応の必要性

四相モデルに零応を置く理由は、偏位がどのように関係を帯びた構造差となるかを記述するためである。
零振は偏位の発生を扱い、零応は偏位が生成内部で関係を持つ局面を扱う。
したがって、零応は四相のなかで独立した機能を担う。

3　零振との機能差

零振と零応の差は量ではなく機能である。
零振は均衡に生じる偏位、零応は偏位が関係を帯びた構造差として成立する位相である。

零振と零応の差は測定量の大小ではなく、偏位と関係化という機能差に属する。

4　比較座標：現れと感応

現象学における「現れ」や意味生成は、主体と世界の関係のなかで記述される。零応が扱うのは、主体に何かが与えられることではなく、零振として生じた偏位が世界側深層生成の内部で関係を帯びる局面である。

このため、零応を「現象学的な現れの直前段階」と置く必要はない。両者の差は時間的な前後ではなく、世界側の関係化と主体側の現れという説明対象の差として理解される。

日本思想・美学における自然との感応的理解を比較座標として置く場合も、零応の「応答」を主体と自然の相互感応へ拡張しないことが必要である。零応には対話する主体や人格化された世界を仮定せず、偏位が生成内部の関係として組織されることだけを記述する。

5　意味の成立との距離

零応は、後に意味が成立し得る条件の一部に関与するが、意味内容そのものは主体側の後続過程に属する。

主体や観者による意味づけは可能である。その意味は、零応の世界側構造と区別して扱われる。世界側構造と主体側経験は、同一内容の伝達関係ではなく、別の領域にありながら関係する。

6　主体側応答との区別

零応と主体側の応答は、同じ「応答」という語を含んでも扱う対象が異なる。零応は世界側深層生成における構造差である。主体側の身体的・知覚的変化は第四章で内部変調として扱う。

7　外層構造との関係

第一章の四相は深層生成を記述し、第二章の外層三相は一つの外層過程を異なる方向から記述する。両者には連関があるが、深層四相から外層三相へ一対一に対応する生成階段は設定しない。Proto-Qualia は零応の直接生成物として置かず、外層構造全体に関わる境界概念として第三章で定義する。

零応の概念的役割はここで限定される。零応は、深層生成のなかで差が関係化する局面を説明する。外層構造の具体的な配置や時間密度、主体側の質的応答、写真機による定着は、それぞれ後続章の説明責任となる。

この分業が維持される限り、零応は理論全体の万能な接続概念へ肥大化しない。

8　　写真論上の位置

零応は、一回的撮影関係事象に関与し得る世界側深層生成の一位相として位置づけられる。

写真成立には、世界側構造、主体側内部変調、身体的位置、判断、写真機の作動、時間的切断が関与する。

零応は、写真成立の単独原因ではなく、一回的撮影関係事象に関与し得る世界側深層生成の一位相である。

IV　　還零（Zero-return）

中性化と再開可能性

1　　定義

還零とは、零振と零応を経て生じた差が、一つの方向へ固定され続けることなく、中性化を伴う再均衡へ向かう位相である。

回帰の対象は「過去の同一状態」ではなく、再び偏位が生じ得る中性的均衡である。

還零は、生成を閉じる終点というより、次の生成可能性へ開く位相として機能する。

2　　中性化

還零における中性化は、差を消去する操作ではなく、差が特定方向を占有し続ける状態から再均衡へ移ることを指す。

このため、還零後の状態は、偏位と応答を経ていない元零と数的に同一とは扱わない。

四相モデルは、生成履歴の非同一性を保持したまま再均衡を記述する。

この非同一性があるため、還零は単純な「元へ戻ること」とは異なる。

回帰の機能は、過去状態を復元することよりも、特定方向への固定から構造を解放し、新たな偏位可能性へ開くことにある。

したがって、還零は終結と開始の両方に関係する。ただし、それを時間的な瞬間として一点化せず、生成モデル上の機能として扱う。

3　　目的論の回避

還零の理論的役割は、世界の自己維持目的を説明することではなく、偏位と応答の後に生じる中性化という機能差を記述することにある。

この限定により、四相へ宇宙論的な目的を付与することを避ける。

還零は、四相内部で回帰を区別するための位相である。

4　　回帰と循環

四相は循環的な構造を持つ。

ただし、その循環は同じ内容を反復する閉じた円運動ではなく、生成履歴を経た後に再び偏位可能性が開かれる構造である。
したがって、

元零 → 零振 → 零応 → 還零 → 再均衡 → 新たな偏位可能性

という記述によって、四相の循環性は、同一内容の反復ではなく、再均衡の後に偏位可能性が再び開かれる構造として示される。

5　比較座標：中性化と収束の語彙

現象学で中性化や判断停止に関わる操作を論じる場合、その分析は主体側の経験や志向の様態に属する。還零が記述するのは、そうした主体的操作ではなく、世界側深層生成において差が一方向へ固定され続けず、再均衡へ向かう機能である。
したがって、還零と現象学的な中性化は同じ語を共有し得ても、説明対象が異なる。還零を主体の志向性が沈静する過程として理解すると、世界側生成と主体側経験の区別が失われる。
また、日本美学に見られる収束、静まり、余韻といった語彙は、還零の再均衡を感覚的に説明する比較語にはなり得る。しかし還零の定義は情緒的な余韻や象徴的消散には置かれず、生成が再び偏位可能な均衡へ開かれるという構造上の機能に置かれる。

6　情緒的静寂との区別

還零は世界側深層生成における中性化と再均衡を記述する。
撮影者や観者の感情的沈静、作品に残る余韻、「凪」といった語は、それぞれ別の成立層に属する。

還零が記述する中性化は世界側生成に属し、主体的・作品的な静けさは別の領域に属する。

7　写真論上の位置

還零は、写真成立へ関与する世界側生成の背景を与える。
撮影事象を四相の特定一点へ固定するのではなく、世界側生成が差の発生だけでなく中性化と再開可能性を含むことを示す。
写真の一回性は、第五章で一回的撮影関係事象の数的非同一性として論じる。

V　四相の連関構造

生成、差、回帰

四相は、世界側深層生成を次の機能差として記述する。
元零は、差が特定の方向へ優勢化していない均衡を与える。

零振は、その均衡に生じる方向未確定の偏位を示す。
零応は、偏位が関係を持つ構造差として応答性を帯びる局面を示す。
還零は、その差が固定され続けることなく、中性化を伴う再均衡へ向かう局面を示す。
四相は、写真成立以前の世界側生成を、差の発生、関係化、再均衡へと開かれる推移として分節する。

1　連続性と境界

四相は、同一の生成過程を機能差によって分節したものである。
各相の境界は、記述上どの機能を扱っているかによって設定される概念的境界である。
この意味で、四相は連続性と区別可能性を同時に持つ。

2　時間性

四相には論理的な順序がある。
その順序は時計時間の四段階ではなく、生成履歴を伴う機能上の推移である。
零振を経た生成、零応を経た生成、還零を経た生成は、それぞれ前段階と数的に同一ではない。
四相の各局面は数的に同一の状態へ戻るのではなく、生成履歴を伴う時間性を持つ。
写真の一回性は、この時間性から直接導出せず、第五章で世界、主体、写真機、時間的切断が形成する一回的撮影関係事象の数的非同一性として論じる。

3　因果性

四相は、目的的因果よりも機能差の記述を優先する。
還零は世界の目的を仮定せず、偏位と応答の後に生じる中性化として記述される。
四相の理論的役割は、生成過程の機能差を分析可能にすることにある。

4　写真成立との関係

零式四相は、写真成立に関与し得る世界側深層生成を記述する。
写真成立には、主体側内部変調、写真機、身体的位置、判断、時間的切断が加わる。
したがって、四相は写真成立論における世界側深層生成の基礎モデルとして位置づけられる。

5　説明範囲と限界

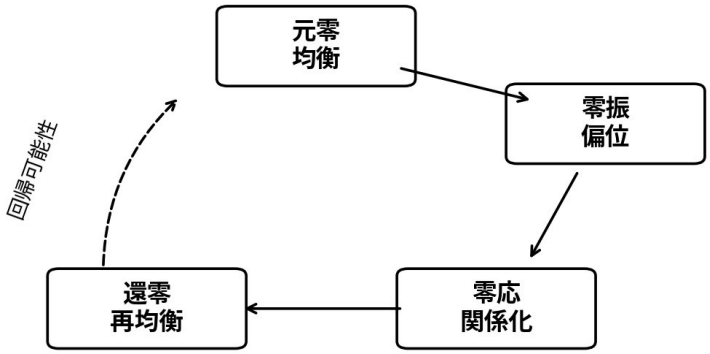
零式四相によって、写真成立以前を空白ではなく生成として記述できる。
世界側の差を主体の意図へ還元せず、深層生成と主体経験を別の領域として扱いながら、差の発生、関係化、再均衡を一つの生成推移として分節する。
このモデルの責任範囲は、写真芸術論の内部で世界側深層生成を記述することにある。

宇宙一般の起源、神経系の知覚機構、作品価値、観者の感情内容は、それぞれ別の問題領域に属する。

6　概念的識別条件と理論的整合性

四相の区別は、それぞれが異なる説明機能を担うことによって成立する。
元零は均衡の基準を、零振は偏位を、零応は関係化を、還零は再均衡を記述する。
これらが相互に置換可能であれば、四相として分節する理論的理由は失われる。
同時に、深層四相は、後続章で扱う外層構造、主体側内部変調、写真成立、作品運用の各概念と役割を競合させない。四相だけで写真成立を完結させず、責任範囲を世界側深層生成の記述に限定する。
四相モデルでは、各相の機能差と後続概念との分業を保持する。
いずれかが崩れると、深層生成と後続する記述領域の説明機能が重複する。
以上の四相の機能差と回帰可能性を、図1 に示す。

図1　零式四相――世界側深層生成の位相推移



機能上の配置。測定時間・機械的因果を示さない。

VI　深層四相から外層構造へ

生成位相と記述次元の分離

零式四相は世界側深層の生成位相を記述する。
第二章で扱う構造一次相、構造複合相、構造時間相は、同じ世界側に属しながら役割を異にする。外層三相は、一つの外層過程を局所差、配置状態、時間的密度という異なる方向から記述する次元である。
深層四相と外層三相を一つの生成階段へ連結すると、生成位相と記述次元が混同される。
同様に、零応と構造一次相、還零と構造時間相を一対一対応させると、各概念の説明機能が重複する。

したがって、

- 深層四相 = **生成の位相差**
- 外層三相 = **外層過程の記述方向**
- 運用三徴 = **作品確認の実務語彙**

という三つの区分を維持する。

次章では、この役割の差を前提に、世界側外層構造を三つの記述次元から検討する。

エピローグ　還零のかすかな輪郭

一枚の写真が成立したあとも、世界はその像の外で続いている。

撮影の一回性は戻らない。写真は、その出来事の痕跡を携え、撮影とは別の時間へと移っていく。像に残らなかった光や動き、身体の位置、周囲の気配は、そのまま世界の側へ過ぎていく。

やがて作品は、まだ出会っていない視線の前に置かれる。そこで開かれる経験は、過去の撮影を反復するものではない。残された像と現在とのあいだに、その都度あらたな関係が生じる。

作品が時間を経るにつれ、撮影の場は過去へ退いていく。展示される場所も、見る者も、その像を取り巻く文脈も移り変わる。それでも、写真の起源となる一回の出来事が、別の出来事へ置き換わることはない。残された痕跡は、異なる現在との関係を重ねていく。

写真の時間と世界の時間は、そこで同じ方向を歩まない。像は過去の一回性を抱えたまま現在へ現れ、世界はその外側で更新され続ける。

偏位と応答は収まり、構造は中性へ向かう。ひとつの推移が閉じても、世界の変化は終わらない。写真はその流れから切り出された痕跡として、別の時間を進む。

還零は、同じ状態への復帰ではない。
中性化を伴う再均衡は、ふたたび差が生じ得る余地を含む。

還零の先に、別の地平があるのではない。

写真成立を問うたび、問いはふたたび零の地平へ戻る。

Notes

以下の注は、外部理論を零式写真芸術論の論理的基盤として置くためではなく、形成史上の参照、比較座標、概念境界、同時代的文脈を追跡可能にするための参照装置である。

1. 鶴見俊輔『限界芸術論』（東京：勁草書房、1967 年）。本論では、限界芸術を零式写真芸術論の理論的基礎として扱わず、成立済みの芸術制度からその条件へ問いを遡らせる形成史上の比較座標として限定して参照する。

2. Humberto R. Maturana and Francisco J. Varela, Autopoiesis and Cognition: The Realization of the Living (Dordrecht: D. Reidel Publishing Company, 1980). 本論では、外部からの作用と作用を受ける側の内部変化を区別する思考を、主体側内部変調の形成史上の比較座標として限定して参照する。オートポイエーシスを写真行為そのものへ同型適用するものではない。

3. 量子論との比較における代表的な歴史的参照として、Niels Bohr, Atomic Theory and the Description of Nature (Cambridge: Cambridge University Press, 1934) を置く。本論の四相や写真成立論をBohr の物理学から導出するものではなく、量子論との接触が形成史上開いた問いと、その比較限界を追跡するための参照である。

4. Edmund Husserl, Ideen zu einer reinen Phänomenologie und phänomenologischen Philosophie. Erstes Buch: Allgemeine Einführung in die reine Phänomenologie (Halle: Max Niemeyer, 1913); Maurice Merleau-Ponty, Phénoménologie de la perception (Paris: Gallimard, 1945). 本論では、志向性・現象構成・身体的知覚を、主体側経験と世界側生成の説明対象を区別するための比較座標として参照する。

5. 写真理論との比較では、C. S. Peirce のindex、Roland Barthes の写真と過去の現実との時間関係、Walter Benjamin の複製技術論、Susan Sontag の写真文化批判を、成立済み写真を扱う主要な比較座標として参照する。各論点の参照文献は注10〜13 を参照。

6. David J. Chalmers, “Panpsychism and Panprotopsychism,” in Torin Alter and Yujin Nagasawa, eds., Consciousness in the Physical World: Perspectives on Russellian Monism (New York: Oxford University Press, 2015), 246–276. 本論との比較は、panprotopsychism をProto-Qualia の起源とするためではなく、phenomenal experience に先行する性質をめぐる形而上学的議論との境界を明確にするために行う。

7. Torin Alter and Sam Coleman, “Russellian Physicalism and Protophenomenal Properties,” Analysis 80, no. 3 (2020): 409–417, https://doi.org/10.1093/analys/anaa006. 同論文がprotophenomenal properties をnon-structural properties として論じる点は、構造的閾値として定義される本論のProto-Qualia との相違を示す比較点となる。

8. Marcel Kvassay, “The Meta-Problem and the Transfer of Knowledge between Theories of Consciousness: A Software Engineer’s Take,” arXiv:1903.03418 (2019), https://arxiv.org/abs/1903.03418. proto-qualia という文字列の先行使用を確認するための参照であり、本論との概念的同一性や系譜関係を示すものではない。

9. Francisco G. Varela, Humberto R. Maturana, and Ricardo B. Uribe, “Autopoiesis: The Organization of Living Systems, Its Characterization and a Model,” BioSystems 5, no. 4 (1974): 187–196, https://doi.org/10.1016/0303-2647(74)90031-8; Humberto R. Maturana, “The Organization of the Living: A Theory of the Living Organization,” International Journal of Man-Machine Studies 7, no. 3 (1975): 313–332, https://doi.org/10.1016/S0020-7373(75)80015-0. 本論では、自己産出や構造決定性を写真実践の理論へ移植せず、外部作用と主体側変化の関係を考える限定的な比較に用いる。

10. Charles Sanders Peirce, Collected Papers of Charles Sanders Peirce, vol. 2, Elements of Logic, ed. Charles Hartshorne and Paul Weiss (Cambridge, MA: Harvard University Press, 1932), CP 2.281. 写真を対象との実在的・物理的結びつきを持つindex の例として扱う議論を参照する。本論では、指標性と、一回的撮影関係事象を起源とする写真痕跡の定義を区別する。

11. Walter Benjamin, “The Work of Art in the Age of Mechanical Reproduction,” in Illuminations, ed. Hannah Arendt, trans. Harry Zohn (New York: Schocken Books, 1968), 217–251. 本論では複製可能性と真正性をめぐる議論を、撮影事象の一回性と複製可能な実現形態を区別する比較座標として用いる。

12. Roland Barthes, Camera Lucida: Reflections on Photography, trans. Richard Howard (New York: Hill and Wang, 1981). 第五章では写真と過去の現実との時間的非対称性、第六章ではpunctum を観者固有の作用点に関する比較座標として限定参照する。

13. Susan Sontag, On Photography (New York: Farrar, Straus and Giroux, 1977). 写真が知識、証拠、所有、経験、消費などの社会的・文化的実践へ関与する問題を、写真成立後の使用・解釈を扱う比較座標として参照する。

14. 同時代の写真・生成画像環境については、Aperture, no. 257, Image Worlds to Come: Photography & AI (Winter 2025; published December 1, 2024); Rob Horning, “What Is Realism in the Age of AI?,” Aperture, January 31, 2025; Foam Magazine, no. 66, MISSING MIRROR – Photography Through the Lens of AI (2024) を参照する。これらは第七章の同時代的文脈を確認する資料であり、零式写真芸術論の理論的基盤ではない。

Bibliography

本Bibliographyは、零式写真芸術論の「一次的理論基盤」を列挙するものではない。本文で実際に機能している形成史上の参照、比較・概念境界、同時代的文脈を、役割別に整理する。

A　理論形成・理論参照文献

鶴見俊輔.『限界芸術論』. 東京：勁草書房，1967 年.

Maturana, Humberto R., and Francisco J. Varela. Autopoiesis and Cognition: The Realization of the Living. Boston Studies in the Philosophy and History of Science, vol. 42. Dordrecht: D. Reidel Publishing Company, 1980.

Varela, Francisco G., Humberto R. Maturana, and Ricardo B. Uribe. “Autopoiesis: The Organization of Living Systems, Its Characterization and a Model.” BioSystems 5, no. 4 (1974): 187–196. https://doi.org/10.1016/0303-2647(74)90031-8.

Maturana, Humberto R. “The Organization of the Living: A Theory of the Living Organization.” International Journal of Man-Machine Studies 7, no. 3 (1975): 313–332. https://doi.org/10.1016/S0020-7373(75)80015-0.

B　比較・概念境界参照文献

Husserl, Edmund. Ideen zu einer reinen Phänomenologie und phänomenologischen Philosophie. Erstes Buch: Allgemeine Einführung in die reine Phänomenologie. Halle: Max Niemeyer, 1913.

Merleau-Ponty, Maurice. Phénoménologie de la perception. Paris: Gallimard, 1945.

Bohr, Niels. Atomic Theory and the Description of Nature. Cambridge: Cambridge University Press, 1934.

Chalmers, David J. “Panpsychism and Panprotopsychism.” In Consciousness in the Physical World: Perspectives on Russellian Monism, edited by Torin Alter and Yujin Nagasawa, 246–276. New York: Oxford University Press, 2015.

Alter, Torin, and Sam Coleman. “Russellian Physicalism and Protophenomenal Properties.” Analysis 80, no. 3 (2020): 409–417. https://doi.org/10.1093/analys/anaa006.

Kvassay, Marcel. “The Meta-Problem and the Transfer of Knowledge between Theories of Consciousness: A Software Engineer’s Take.” arXiv:1903.03418, 2019. https://arxiv.org/abs/1903.03418.

Peirce, Charles Sanders. Collected Papers of Charles Sanders Peirce. Vol. 2, Elements of Logic. Edited by Charles Hartshorne and Paul Weiss. Cambridge, MA: Harvard University Press, 1932.

Barthes, Roland. Camera Lucida: Reflections on Photography. Translated by Richard Howard. New York: Hill and Wang, 1981.

Benjamin, Walter. “The Work of Art in the Age of Mechanical Reproduction.” In Illuminations, edited by Hannah Arendt, translated by Harry Zohn, 217–251. New York: Schocken Books, 1968.

Sontag, Susan. On Photography. New York: Farrar, Straus and Giroux, 1977.

C　同時代写真・画像環境参照

Aperture. No. 257, Image Worlds to Come: Photography & AI. Winter 2025. New York: Aperture. Publication date: December 1, 2024. ISBN 9781597115698.

Horning, Rob. “What Is Realism in the Age of AI?” Aperture, January 31, 2025. https://aperture.org/editorial/what-is-realism-in-the-age-of-ai/.

Foam Magazine. No. 66, MISSING MIRROR – Photography Through the Lens of AI. Amsterdam: Foam, 2024. https://www.foam.org/foam-magazine/archive/66-missing-mirror.

零式写真芸術論

零の地平と写真成立の構造

Zero-Horizon Photographic Art Theory

著者　木村尚樹

Edition　Japanese Edition / Version 1.0

Form　Theoretical Monograph / A4

2026

© 2026 Naoki Kimura. All rights reserved.